ひびきあい
学校だより11月号
令和4年10月31日
横浜市立新田小学校

読書の秋

校長　村岡　靖

子どもは一冊の本である。
その本から、
われわれは何かを読み取り、
その本に、われわれは
何かを書き込んで
いかねばならない。
ペーター・ローゼッカー

２０世紀を代表する物理学者のアインシュタインは、約２００年前の、やはり天才物理学者のニュートンの事をこう言っています。
「ニュートンにとって自然は開かれた本である。ニュートンはそこに書いてある文字を苦も無く読むことができた。」
リンゴが木から落ちても人は何も考えません。当たり前だと思うから。ニュートンは自然界のそのような現象から、まるで本を読むようにその仕組みを読み解いていったのです。
私たち大人は、子どもの言葉や行動から子どもの事を読み解いていかなくてはなりません。そしてまた、その本に何かを書き込んでいくのです。ペーター・ローゼッカーはその大切さと難しさを詩っています。

読書の秋です。本校の学校司書、小股純子先生は子どもたちの本の相談に親身になってのってくれます。子どもたちにとって大切な一冊がきっと見つかるでしょう。人との出会いはとても大切ですが、お気に入りの本との出合いもきっと人生を豊かにしてくれるはずです。

小学生のころ、本好きの父親がお小遣いと一緒に渡してくれる本が毎月楽しみでした。「日本の歴史」や「世界の名作シリーズ」など、定番の本からおすすめの本までジャンルも様々でした。自分で読書が楽しいと思うきっかけになったのは、その中の一冊で、小学４年生の時に読んだ「だれも知らない小さな国」（佐藤さとる著　講談社青い鳥文庫　シリーズ全６巻）です。
美しい自然の中で、ぼく（セイタカさん・主人公の少年）とコロボックル（こぼしさま・小人）が出会い、絆を深めていく物語で、読み終わった時には「うちの庭にもコロボックルがいるかもしれない！」「いつか私にも見えるかも？」と、物語の世界に夢中になっていました。それは今も続いていて……。
ドキドキ、ワクワクしながら主人公になりきれるのも読書の楽しみの一つだと思います。図書室では、そんな読書の楽しさを子どもたちに知ってもらい、お気に入りの一冊に出合うためのお手伝いをしていきたいと思っています。
学校司書　　小股　純子